

8 シルクアイランド奄美を目指す

<背景> 養蚕農家の高齢化、後継者不足により、平成 30 年の養蚕農家数、繭生産量はともに平成 20 年の約 3 割の水準まで減少。これに伴い、生糸の生産数量も大きく減少。

養蚕は、かつて、東北地方以南の各地（奄美では龍郷町秋名集落）で養蚕業が行われていた。

現在は、関東、東北地方を中心に小規模な産地が残るのみで群馬県が生産量の 4 割を占める状況である。このような状況に鑑み、農林水産省も令和 2 年 9 月に「新蚕業プロジェクト」を発表し、シルクを利用した新たな市場創出と、需要にあった生産体制の構築に向け、今後の取組方針を示している。奄美群島においても養蚕業を推進し、シルクアイランド奄美を目指す。

<技術> 遺伝子組換え技術の進展により、様々な機能をもつ機能性シルクが開発されており、平成 29 年には緑色蛍光の遺伝子組換えカイコの一般飼育が承認されている。

また、雄のみが生まれる特徴をもつ品種「プラチナボーイ」を使用し、川上（養蚕、製糸業）と川下（染織・流通・販売業）が一体となって、純国産絹製品づくりに取り組んでいる「プラチナボーイ研究会」がある。繭生産から最終製品に至る各工程関係者の名前を表示して、顔の見える製品づくりを行っており、各工程関係者がより良い「モノ」づくりを行う意識をもつことで技術の向上が図られている。

<取組み> 養蚕期間は飼育回数や気象条件にもよるが、おおむね 5 月～10 月であり、その他の期間については、他の作物の導入が可能なことから、養蚕業への新規参入者や果樹農業者などが兼業を行うことで産業化を加速させることができる。

そのためには、養蚕農家をフォローするための組織や助成金制度を構築する必要がある。

<効果>

- ・純国産性の奄美シルクを使用して大島紬を生産することによりブランドアップが期待できる。
- ・シルクは繊維部門でなく他部門への活用も期待できる。
(すでに絹化粧品を生産している奄美アーダンが笠利にある。)

<奄美フューチャーセンターの設置>

フューチャーセンター（future center）とは、企業、政府、自治体などの組織が中長期的な課題の解決、オープンイノベーション、ソーシャルイノベーションによる創造を目指し、様々な関係者を幅広く集め、対話を通じて新たなアイデアや問題の解決手段を見つけ出し、相互協力の下で実践するために設けられる施設である。

このような施設を奄美群島の組織として設置し、シルクアイランド奄美構想はもとより、大島紬の課題や発展、奄美特有の動植物の保護や活用等のテーマについて、企業等を招致してフューチャーセッションを行い、イノベーションを実現する。

(龍 一文)